廣行はれ候樣可取計所、兩人義、醫術修行之場所出來候義、不得心之趣相聞、不埒之心得ニ候、尤學文醫道之義ニ付、何流に限り可弘と、安元申候ハヾ、其段ハ決而相成間敷事ニ候、兩家共子供之內にも世上江教させ、可然厚學之者も候はゞ申談、學館江も差出し、講師之內江も差加候程ニも可致義ニ候處、却而醫學館江弟子共差出間敷と申儀は口合候間醫廣く相學候義無用と存候所存と相聞、典藥頭家におゐて、別而不埒之心底ニ有之段可申聞旨、御沙汰ニ候、

右之趣、酒井石見守殿於御宅、昨夜御同人被仰渡候、御目付村上三十郎相越、

九月廿四日

〔憲教類典四ノ十醫學館〕天明六丙午年正月十二日

安藤對馬守殿

多紀安元、醫學館再建有增出來ニ付、以來每年二月中旬より、五月中旬迄、百日之內、諸醫師之子弟、幷醫道に志有之候者は、醫學館之內學舍之中ニ爲致止宿、醫學教育致し候間、望之者は、可罷越候、仕方は左之通候條、其旨を致承知、猶又前廣ニ、學館之役人被懸合、委細之儀納得之上、教育可請之候事、

一當午年二月中旬より、五月中旬迄、百日之內教育興行ニ付、諸醫家若年之輩出席、或は致止宿教育受度輩は、陪臣は其家之役人、町方は名主町役人差添、正月晦日迄、醫學館江罷越、學館役人江懸合、請人を立、書付差出候上にて、教育可受候事、

一銘々之居宅より、通ひに而出席致度輩は、正月晦日迄、親兄弟又は身寄之もの差添、學館役人江掛合置、出席可有之候、尤百日之內無懈怠致出席、講釋稽古事等遂承可申旨、證人より書付取之候迄に而、出席致させ候事、

一宅より通ひ、致出席候輩は、每日學館へ出入之刻限を相改め、帳面に留置候事、